

opinion

「互いに勝者」円満のかぎ



46年生まれ。独連邦
議会議員、欧州委員会
独代表を経て、96年か
ら現職。著書にメルケ
ル首相の伝記など。

ゲルト・
ラングートさん

独ボン大教授

ドイツでは戦後、連合国の合意でヒトラーによる独裁政治の反省から政府の権力を制限する基本法が作られ、その下で民主主義が発展した。州政府に強い権限を与え、中央の権力は弱められた。53年には得票率5%未満の政党は議席を得られない「5%条項」を導入。小党乱立が防がれ、政治は安定した。その代わり、過去1度を除き過半数を

獲得する政党もなくなり、連立政権が基本となった。だが、ドイツでも大連立は例外だ。66年の大連立当時、議会には3党しかなく、1党が連立政権から離脱した結果の緊急事態だった。背景は違うが、いまの大連立(同③)もほかに選択肢がなかった点では同じだ。かつては、対立する左右2大政党の隔たりが大きく、連立しにくかった。

3党で政権を担えば中道化する。小党にとつて、中道化で主義主張があいまいになることは党内不和を生む。だからこそ、事前の綿密な協議が重要になる。日本が大連立を考えるなら、これは重要なことだ。独の66年の大連立時、政策文書は2頁、9項目の合意しかなく、結局、短命に終わった。事前協議が十分だと、争いで終わる。

連立与党内の造反が重要なブレーキ機能を果たすことを見越してはならない。大連立下では絶対安定多数の安心感から議員が政策への不満を隠さず、造反が起こりやすい。だが、内部からの警告を軽んじてはならない。重要なメッセージの場合もある。日本の郵政民営化問題では造反議員が党を追われたが、大連立や強い与党の維持には、内からのブレーキ信号に敏感になることが肝要だ。

不確定要素が増えた選挙は連立の形を予測することも難しくしている。地方で旧東独政府の流れをくむ左派政党が躍進しているのは、支持政党の多様化を裏付けている。過半数を維持するため、連邦レベルとは異なる組み合わせもあり得る。主義思想の異なる

また連立では、どの党も利益が得られるようにすることが大切だ。互いに「我が党が勝者だ」と言える状態が政権運営を円滑にする。連立内右

派が労働者の解雇条件を緩めようとした際、左派が強く反対した。この時、右派は方針を撤回し、代わりに左派は法人税率の引き下げを認めた。こういう貸し借りを常に繰り返してバランスを保っている。党首の独断は絶対にはいけない。日本のように政党指導者が強く、一方で人気がなくなれば交代する状況は、連立にとつては危険だ。

(聞き手・金井和之)